

〈研究ノート〉

## 幼児期の人間関係を育む教育に関する一考察

—幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」にモンテッソーリ教育法を適用する試論—

岡本 仁美\*

### 要約

本稿は、近年の社会的課題への対応と発達保障の面から重要であるといわれている、幼児期における人間関係力の育ちについて、具体的な教育法を検討することを目的とした。

幼稚園教育要領で示された教育の目的とモンテッソーリ教育の目的は、「人格形成の基盤づくり」という点において共通であり、教育によって育てることを求められている能力・資質及び育て方のプロセスには類似性がある。この両者の比較検討によって具体的方法を考察した。その結果、モンテッソーリ教育の構成要素の一つである「環境」の調整の方法は、幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」の領域で、ねらいを達成するための指導事項として示されている「内容」の項目に、関与することが明らかになり、人間関係力を育成するための教育法として、モンテッソーリ教育の系統的な具体的方法は有効であると結論づける。

キーワード 幼稚園教育要領 人間関係 モンテッソーリ教育 環境 人格形成

### 目次

1. はじめに
2. 幼児期における人間関係力の育ちの重要性と今日的課題
3. 保育内容「人間関係」へのモンテッソーリ教育法からの提案
  - 3.1 モンテッソーリ教育と幼稚園教育要領の接点
  - 3.2 保育内容「人間関係」にモンテッソーリ教育法を適用しての考察
4. おわりに

## 1. はじめに

平成29年3月31日に告示・改訂された新「幼稚園教育要領」が平成30年の4月1日から施行された。この新しい幼稚園教育要領では、「子供たちが急速に変化し予測不可能な未来社会において自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成すること」<sup>[1]</sup>とされている。今回より新設された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とし

での「10の姿」にも、自立心や協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わりなど、その内容が色濃く反映された。

このことは、急激な社会の変化や国際化に対応できる能力を育てる教育を目指し、幼稚園等には、教育の向上が求められているということであろう。さらに幼稚園教育要領には前文が加わり、「前文」と「第1章総則」の両方で「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を養う重要なものである」<sup>[2]</sup>と確認されている。社会性の発達としての人間関係力の教育は、現代の社会的課題への予防的対応の側面と発達保障的側面の両面において、人格形成の基盤作りの観点から、大変重要であると考えられる。

医師であり、独自の教育法を考案した教育者であったマリア・モンテッソーリ (Maria Montessori : 1870-1952 今後はモンテッソーリ)<sup>[3]</sup>は、「子どもの教育は、特に3歳から6歳までが肝心です。この時期は、性格と社会性の形成期にあたるからです。」<sup>[4]</sup>と幼児期の社会性の発達についての重要性を強調している。

近年、幼児期の人間関係力を育てる教育の研究は散見されるが、その具体的な方法は行事や特別プログラムなどの単発の内容を通して検討されているものが多く、幼稚園教育要領に示され、求められているような一体的、系統的、総合的な遊びを、日常的、継続的に教育する具体的な方法の研究は、十分とは言いきれない。そこで本稿では、幼児期の人間関係を育む具体的な教育方法を検討することを目的とする。その際、教育方法に系統性、総合性を有するモンテッソーリ教育の「環境」についての調整の方法と幼稚園教育要領における保育内容の領域の1つである「人間関係」の指導項目「内容」に注目する。両者の比較検討から、人間関係力を養成するための教育法としてモンテッソーリ教育が提案できる方法を有するかどうかについて考察する。

## 2. 幼児期における人間関係力の育ちの重要性と今日的課題

前述したように幼児期は、その後の人生に影響を与える、人格形成の基盤を作る重要な時期である。幼児期は乳児期の母親や父親、またはそれに代わる特定の大人との間に形成した愛着関係に基づいて、複数の人とのかかわりを深め、興味や関心の対象を広げ、認知や情緒を発達させていく。また、身体の発達とともに、生活習慣が確立する時期である。文部科学省は「子どもの徳育に関する懇談会」での配布資料の中で、幼児期について、「周囲の人や物、自然などの環境とかかわり、全身で感じることにつながる体験を繰り返し有することで、徐々に、自らと違う他者の存在やその視点に気づきはじめていく。いわば、遊びなどによる体験活動を中心に、道徳性や社会性の原点を持つことになる時期である」<sup>[5]</sup>と人間関係の基礎がつくられる重要な時期であることを説明し、重視すべき課題として基本的な生活習慣の形成、道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実などを挙げている。

我が国において近年、急速な社会構造の変化を背景に、社会的な課題を抱える思春期、青年期の若者が増えている。不登校を例に挙げると文部科学省の報告書によると、「小・中学

校における、不登校児童生徒数は144,031人（前年度133,683人）であり、不登校児童生徒の割合は1.5%（前年度1.3%）である。不登校の要因を『本人に係る要因』で見ると、『学校における人間関係に課題を抱えている』では、『いじめを除く友人関係をめぐる問題（69.7%）が突出している』<sup>[6]</sup>と示されている。学校での人間関係の課題により、社会生活（学校生活）に参加できない思春期の子どもが増えているという現状である。

このような現代の子どもたちをめぐる社会環境も考慮すると、今まで以上に、家庭の子育てにおいては子どもの心身を豊かに育て、人間関係の基盤を作ることが重要となる。しかし、現代の家庭においては、核家族化や少子化の進展で、家庭内で兄弟姉妹や祖父母との触れ合いを通して、楽しさを共有しながらも、切磋琢磨したり、折り合いをつけたりする機会が減少している。さらには、近年、子育て世帯において、経済的に困難な世帯の割合の増加や地域とのつながりの希薄化による保護者の育児に関する不安感の増大により、児童虐待の相談件数は増加傾向にある。厚生労働省から「平成30年度の児童相談所による児童虐待相談対応件数（速報値）」が公表され、「件数は15万9850件で、前年度より2万6072件（19.5%）増え、過去最多を更新した」<sup>[7]</sup>との結果が報告された。このように子どもの成長の基盤である家庭環境の問題も大きくなっている現状があることは深刻な事態である。

このような社会状況を受けて平成27年度から「子ども・子育て支援新制度」<sup>[8]</sup>が実施されたことにより、幼稚園を通じて全ての子どもが健やかに成長するよう、質の高い幼児教育を提供することが一層求められてきている。とりわけ、社会性の発達、人間関係力の育ちは、幼児教育の現場においても重点的な課題となるであろう。

### 3. 保育内容「人間関係」へのモンテッソーリ教育法からの提案

#### 3.1 モンテッソーリ教育と幼稚園教育要領の接点

3.2で、幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」に示された教育に対して、まず本節ではモンテッソーリ教育と幼稚園教育要領の間の接点について明らかにする。

新しい幼稚園教育要領には冒頭に「前文」が加えられたことは前述したが、この前文では、まず、教育基本法第1条の「教育とは人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」<sup>[9]</sup>ことが示されている。この教育の目的に基づいて幼児期の教育では、「前文」と「第1章総則」で「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成基礎を養う重要なものである」と確認しているのである。

モンテッソーリ教育法は日本において、その内容の一部が注目され「知的能力をあげる、小学校のお受験対策」といった早期教育としての幼児教育だと誤解されることが多いが、できることを増やすことだけが教育の目的ではなく、教育を通して人生の主体者になれるような人格の形成を目的とした教育法である。

高橋（2006）は、モンテッソーリ教育の目標について、「人格が総合的に発達していくときに、子どもに内在している法則性に従い、潜在能力が全て調和して成長していくことであ

る」<sup>[10]</sup>と述べている。モンテッソーリ自身も「人間の人格性が注目されるべきなのである教育法」<sup>[11]</sup>であるとモンテッソーリ教育の人格教育を目的とした全体的理念を、理解するように求めている。また、モンテッソーリは「子どもは、二、三年で将来を左右するような影響を受けます。だから、もしも三歳まで適切に扱われるなら、その子の理想的な原型が出来上がります。ところが環境や最初の三年間の生命力を妨げるなら、様々な欠点を身につけさせることになるのです。0～3歳までに出来上がった欠陥が次の期で無視されるか処理を誤るかで矯正されないと、その欠陥は残るばかりではなく、さらに悪化します。かくて、六歳にして形成された性格的欠陥を身につけた子どもができあがります。六歳以降は、その欠陥は今度は次の時期の観念に影響を及ぼします。これらの欠陥は、その後の精神生活と知性に跳ね返ってきます」<sup>[12]</sup>と幼児期の発達が生涯にわたり影響を与える重要な時期であることを確認している。

2001年～2009年の間にモンテッソーリ教育を受けたのべ千人の子どもの追跡調査を行った相良（2009）はその結果について、著書のなかで、「幼児期に受けた教育の影響が、それぞれの年齢段階で現れるのが見えてきて、まさに『生涯にわたる人格形成の基礎』が幼児期にできたということがわかってきます」<sup>[13]</sup>と説明している。加えて、幼稚園教育要領で「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成基礎を養う重要なもの」と示されていることについて、「小学校以降に明らかになってくる様々な問題行動の原因が幼児期にあることが明白になってきたことで、国が幼児教育を充実させ、その成果が小学校に繋がるようにすべきだと強調するようになってきたのであろう」<sup>[14]</sup>と解説している。

このことから、幼稚園教育要領に示されている幼児教育の目標とモンテッソーリ教育の目的が「生涯にわたる人格形成の基礎を養う」という点で共通することが理解できる。

幼稚園教育要領には、幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力、人間力」の3つが明確に示されている。次にこの3つの資質・能力についてモンテッソーリ教育との接点について考察する。

幼稚園教育要領ではこの3つの資質・能力について、それぞれ部分的に身につけさせるのではなく、「環境と遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むようにするものである」<sup>[15]</sup>と説明している。一方モンテッソーリ教育も、運動、認知、情緒が関連し、影響しあう子どもの発達構造にあわせた環境と系統的、総合的なプログラムを通して全体的な発達を促していく。

子どもの主体性を育てることを目指すモンテッソーリ教育において、環境は教育の重要な柱である。モンテッソーリはその著書で「人間が形成され、そして完成するのは環境との相互作用を通してです」<sup>[16]</sup>と述べ、さらに「子どもは、環境の助けによって自己を形成します。そのため、あいまいな人間形成の方策ではなく、明確な定まった方針が必要となるのです」<sup>[17]</sup>と人格形成にとっての環境の重要さを強調している。

幼稚園教育要領で、この3つの資質・能力は、総合的な指導の中で一体的に育むように示されている点については、モンテッソーリ教育のプログラムでは「日常生活の練習」「感覚

教育」「数教育」「言語教育」「文化教育」の5つの領域間のプログラムに関連をもたせ系統的に教育を実施する。

具体的には、日常生活活動の練習のプログラムをモンテッソーリ教育の基本として、日常生活の中で子どもが出来るようになりたい活動、子どもに身につけてほしい活動を取り出してプログラム化する。そのプログラムをスモールステップで練習できるように、教材や環境を準備して、子どもへの提示法を工夫する。次のステップの感覚教育では、日常生活の練習のプログラムになかで吸収した感覚的な印象を、感覚教具の操作を通して、試行錯誤したり、確認したり、工夫したり、判断したりしながら整理して概念化する。その際に日常生活活動の練習プログラムでできるようになったスキルを使う。その概念を言語教育と数教育の教具によって抽象化し、表現する力を養いながら、理解を深めていく方法である。最終的に文化教育の領域で、それまでの学びを自ら統合して、豊かな生活に向けて総合的な学びの中で人間性を高めていくことを目指す。

一方、幼稚園教育では表現されている育みたい3つ資質・能力のそれぞれの内容について『知識・技能の基礎』では、具体的に豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、できるようになること、『思考力、判断力、表現力の基礎』では、気づいたことやできるようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること、『学びに向かう力、人間性等』では、心情、意欲、態度が育つ中でより良い生活を営もうとすること<sup>[18]</sup>と表現されている。この3つの資質・能力についての説明から、3つの資質・能力は、既に学習した能力を基盤にして、次の能力を獲得するプロセスで育つと解釈ができる。両者の比較により、幼稚園教育要領で示された育みたい3つの資質・能力及び育つプロセスはモンテッソーリ教育の系統的なプログラムとプログラムを通して育つ能力に重なるものが多いと考察できる。

以上のことからモンテッソーリ教育と幼稚園教育要領に示された教育については「教育の目的」「資質・能力及び育つプロセス」において接点を有し、両者は親和性が高いということが理解できる。この結果から、次節では、人間関係力を育てる幼児教育の具体的な方法について、幼稚園教育要領の保育内容の領域の一つである「人間関係」にモンテッソーリ教育法を適用して検討していく。

### 3.2 保育内容「人間関係」にモンテッソーリ教育法を適用しての考察

本節では、モンテッソーリ教育の他の要素と関連しながら、重要な柱として、モンテッソーリ教育体系を構築している「環境」の構造化の方法を、幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」に示された指導事項の「内容」に適用する。そして、その関連を考察し、モンテッソーリ教育が幼児期の人間関係力の教育に対して提案できる方法を有するかどうかについて明らかにする。

まずは、物的環境の構造化についてである。「モンテッソーリ教育の物的構造化の方法の1つめは、使用する道具は、使う目的に応じて解りやすく、使いやすく分類して、秩序立て

て決まった場所に置くという方法である。この方法はやりたいことが見つかったとしても、刺激に影響されて活動を完結できない子どもの目的の達成を助けることになる。例えば、絵を描きたくなくなった子どもが画用紙を机に置いた後、離れたところにクレヨンを取りに行く途中、好きな人形が目に入り、絵を描こうとしていたことを忘れて、人形で遊び始めた。その結果、画用紙を机の上に置いたままの状態になり、教師から『お片づけをなさい』と叱られてしまった。画用紙のそばにクレヨンが置かれていたら、この子どもは自発的に絵を描いて満足した時間を過ごし、達成感を感じて終了することができたのではないだろうか。紙と鉛筆、画用紙とクレヨン、絵具とキャンパス、切り紙と鋏など、一緒に使うものを、使いやすい状態で決まった場所に置くことは、子どもの自発的な活動を達成に導くための環境における工夫である。

また、教材のセッティングの方法が活動の流れに沿っていて、使い方が解りやすくなっているこの調整方法は、遊びの目的を理解することが難しい子どもを、目的的な活動に導くためには有効である。例えば、トレイの上にビー玉が入っている器と空の器、ビー玉がすくえるスプーンが1セットとして置いてあるなどの工夫である。そのようなセッティングにより、その教材が『ビー玉をスプーンですくってとなりの空の器に移すこと』という活動の目的を子どもに教えることとなる。

物的環境の構造化の2つ目としては、使う道具が子どもの身体的なサイズに合っていることである。年齢が低い子どもは姿勢が崩れやすく、机や椅子の高さの調整が必要なことはいうまでもないが、モンテッソーリ教育では、その他、子どもが扱う道具はすべて、子どもの扱いやすい子どもサイズになっている。一般的に子どもが行う『お手伝い活動』としてよく扱われる『掃除』を例に挙げて、モンテッソーリ教育の考え方の特徴を説明する。

教師は掃除について、『大人の仕事の手伝いを子どもが行う』と捉えて、雑巾やバケツ、台布巾など大人と同じサイズの道具をあたえることが多い。しかし、モンテッソーリ教育においては、教育環境の中で行われる活動の主体者はすべて子どもである。掃除においても『子どもの活動』として捉え、それを教師が手伝うという考えから雑巾、バケツ、台布巾など掃除に必要な道具はすべて子どもの扱いやすいサイズになっている。

このような環境整備の方法は子どもが掃除を自発的に行うことを促すだけでなく、子どもが他の活動中に水をこぼすなどの失敗をした時に自ら問題解決できるような配慮でもある。子どもはそのような環境の中で、失敗を恐れず、安心して主体的に過ごすことができるようになる。

モンテッソーリ教育では、子どもにできるだけ日常生活に密着した本物の体験をさせることを重要視して、環境が整えられている。このことが環境の構造化の3つ目の要点である。子どもが過ごす教室内の机の上には、生花が落とすと割れるガラスの花瓶に入れて飾られていて、子どもが毎日水替えをできるようになっている。また、鉛筆が芯を上にして鉛筆立てに立てられていたり、子どもが使いたいときに自由に使うことができるように、鋏が子どもの手の届くところにおかれていたりする。

モンテッソーリ教育の環境は一般的に、子どもの集団の環境としては事故が起こるリスクが高いと思われるがちである。しかし、子ども達が正しい使い方を理解し、繰り返し練習することで危険のリスクは低くなる。現代の幼児教育の現場では、教師がリスクを恐れて「危ない、解らない、出来ない」という先入観で、子どもの経験が乏しくなる傾向にあることも否めない。モンテッソーリ教育においては、集団に所属するひとり一人の子どもの発達や行動特性をしっかりと理解したうえで、使い方によっては危険を伴う道具であっても、使わせないのではなく、正しい使い方を示しながら、計画的に子どもの経験を広げられるような環境を整えていこうとする教師の姿勢が求められている。」<sup>[19]</sup>

これまで述べてきたようなモンテッソーリ教育における物的環境の構造化の方法は、子どもの一人ひとりの発達の状態に合わせる事が可能である。子どもにとっては活動の内容や方法が解りやすく、自分の身体を使って活動しやすい環境となる。この構造化により子どもは、自発的に活動に関わり、自ら目的を達成することができる。また、物の安全な取り扱い方や集団で取り扱う時のルールを理解することになると同時に、失敗した時の問題解決方法などを学習することの助けになる。その結果、子どもは自信や自己信頼感をもって生活できるようになる。この環境の構造化の方法は子どもの自立心を育てることになる。

粕井（2018）は、幼稚園教育要領で示された、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿について「5領域で就学前までに育てたいと考える子どもの姿と10の姿は重なる・・・中略・・・10の姿のうち、領域『人間関係』に重なる姿は『自立心』、『協同性』、『道徳性・規範意識の芽生え』、『社会生活とのかかわり』」<sup>[20]</sup>であると説明している。このことは、人間関係構築の条件の一つとして、「自立心」を育てることの重要性が示されていると理解できる。

「自立心」の視点で、前述したモンテッソーリ教育における物的環境の構造化の方法で育つ子どもの姿と、幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」に示された内容（表1）を比較すると（2）自分で考え、自分で行動する。（3）自分でできることは自分です。（4）いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。（11）友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。（12）共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。という項目との関連性が高い。このことにより、保育内容「人間関係」に示された内容のうち、子どもの「自立心」を育てる事項に対する教育の実施において、モンテッソーリ教育における物的環境の構造化の方法は有効であると判断する。

次に、モンテッソーリ教育における人的環境と保育内容「人間関係」との関連について考える。モンテッソーリ教育における人的環境の一つの構成要素として、幼稚園等における「異年齢による、縦割り集団」による教育（今後は縦割り教育）が挙げられる。

この縦割り教育では3歳児から5歳児の異年齢の子どもでクラスを編成する。幼児期の子どもの発達は同年齢であっても個人差が顕著に表れるが、さらに異年齢集団においては、同年齢集団以上に、個々の発達の状態や経験の違いが大きくなる。子どもの状態像の幅が大きいこのような集団においては、子ども同士が影響し合って育ちあう関係を築きやすく、相手の立場に立って他児の出来ないところをできるように手伝う方法の学習や、出来ないことで

相手の価値を判断しない価値観の構築が期待できる。

モンテッソーリ教育を実施している幼稚園で、発達に多様なニーズがある子どもがいるインクルーシブ教育<sup>[21]</sup>を積極的に行う園が多いのは、このような縦割り教育を行っていることの影響も大きいと考える。インクルーシブ教育を実施しているモンテッソーリ教育幼稚園では、縦割り教育が、障がいの有無にかかわらず、関わり合いを通してそれぞれの子どもの育ちを支える。

「モンテッソーリ教育実施幼稚園で、観察された子どもたちの具体的な様子として①歩行が不安定な年少児の子どもの手を年長児がつなぎ、その子のペースに合わせてゆっくり階段を降りる。②歩行が不安定な発達障害のある年少児の子どもが、自力で階段を降りる姿を、年中児が階段の下で最後まで見守り、降り終えたところで、その場所から離れる。③年中児が食事前の準備の方法をやって見せて、年少児のできないところを手伝う。④気が散りやすい発達障害児が集中して形はめ教具をやっている姿を、年長児が邪魔しないように遠くから見つめて、できると、静かに手を叩いている。などの子どもの姿が挙げられる。

このような、子どもの様子は、かかわり方に直接的、間接的かの違いはあるが、いずれも、関わる相手の立場に立って、相手を認め、思いやりながら、共に育ちあっている子どもの姿である」<sup>[22]</sup>

モンテッソーリは自書の中で、この縦割り教育で育つ子どもたちの様子について「生命が通っています。生きています。年上の子のしている事を理解すると年下の子はファイトを燃やします。年上の子は自分の知っていることを喜んで教えてやります。劣等感を持つ子どももなく、皆がお互いの精神的エネルギーを交換し合うことで健全な正常性を身につけていきます」<sup>[23]</sup>と説明し、縦割り教育で子どもが育つ意義を述べている。

モンテッソーリ教育における人的環境のもう一つの重要な要素は教師である。常に子どもを主体とする教育においては、教師の役割が重要になるとの認識から、モンテッソーリは教師の養成に力を注いだ。

教師の役割について、モンテッソーリは「大人の責任は大きい。徹底的に科学的研究を尽くして幼児の心の要求を明らかにし、それに適切な環境を、幼児のために準備する義務が生じるわけです」<sup>[24]</sup>とその重要性を述べている。

モンテッソーリ教育では教師には、いわゆる「教える人」ではなく、子どもの自らの育ちを「導く」という役割に徹することが求められる。教師は、子どもの「解る、出来る」という喜びを支える。そのためには、今、子どもが必要としているものは何かを良く観察し、察知、理解する必要がある。そのような教師の姿勢を通して子どもに安心感を支え、教師が子ども同士をつなぐ役割を果たすことができると考える。

一人ひとりの子どもの発達を理解した教師が、子ども同士の育ち合いを目的にして、縦割りクラスの中で教育する、モンテッソーリ教育法の人的環境を、物的環境の構造化と同様に幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」に示された内容（表1）に適用する。（表1）の内容のうち、（1）先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。（5）友達と積極的に関わりな

がら喜びや悲しみを共感しあう。(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。(7) 友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。の項目が関連すると判断できる。つまり、モンテッソーリ教育の人的環境の特徴はこの項目の教育において有効な方法として提案できるといえる。

ここでは、モンテッソーリ教育環境を物的、人的に分けて、保育内容「人間関係」の「内容」で示された指導事項との関連を考察した。幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」における指導項目である「内容」に対しての教育を実施するにあたり、モンテッソーリ教育の物的環境、人的環境のそれぞれの方法やその特徴が、主に影響を与える可能性が高いと考察する項目を選択した。その両者の比較検討によりモンテッソーリ教育環境の具体的な調整方法は、その項目についての教育方法として、有効な方法であると判断した。

しかし、モンテッソーリ教育においては、物的、人的環境の調整方法が子どもの育ちにそれぞれ単独で影響を与えることは少ない。保育内容「人間関係」の「内容」においても、物的環境と人的環境の内、主に関連しているものともう一方の両方が影響しあうことで、指導事項の実施において有効性が高まると考えられる。例えば(6)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。という事項を挙げて考えると、主には人的環境との関連性が高いが、自分の考えを主張したり、述べたりするためには、自己判断や自己信頼感が必要であり、また、相手の意見に耳を傾け理解するためには、自己調整力が求められる。それらは構造化された物的環境の主体的な活動を通して自信を育てることが基盤となる。モンテッソーリ教育の「環境」をこの両者を総合的に捉える視点で調整する方法についても、

表1 幼稚園教育要領 保育内容「人間関係」のねらいと内容

<p>[他の人々と親しみ支えあって生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う]</p> <p><b>1. ねらい</b></p> <p>(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。</p> <p>(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、工夫したり協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。</p> <p>(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。</p> <p><b>2. 内容</b></p> <p>(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。</p> <p>(2) 自分で考え、自分で行動する。</p> <p>(3) 自分でできることは自分でする。</p> <p>(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。</p> <p>(5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感しあう。</p> <p>(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。</p> <p>(7) 友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。</p> <p>(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする。</p> <p>(9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。</p> <p>(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。</p> <p>(11) 友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。</p> <p>(12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。</p> <p>(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ。</p>
--

平成30年度施行の幼稚園教育要領から抜粋して筆者が作成

加えて提案できると考える。

#### 4. おわりに

本稿では、子どもを取り巻く現代の社会環境や家庭環境における課題を明らかにし、幼児期の人間関係力の育ちの重要性を確認して、具体的教育方法を検討した。系統的、具体的な教育法を有するモンテッソーリ教育の「環境」の構造化の方法を、幼稚園教育要領の保育内容「人間関係」に示された指導事項の「内容」に適用、比較検討し、目的を結論に導く方法で考察を行った。

その結果として、物的環境、人的環境の両者とも環境の構造化の方法は、保育内容「人間関係」の「内容」の事項に対する教育の実施においては有効であると判断された。幼稚園教育要領において「内容はねらいを達成するための指導事項である」<sup>[25]</sup>と示されていることから、モンテッソーリ教育の環境の構造化は、保育内容「人間関係」のねらい(表1)を達成する方法となる可能性が高いと考えられる。この結果により、モンテッソーリ教育は人間関係を育む幼児教育において提案できる具体的方法を有すると結論付ける。

相良(1978)は、モンテッソーリが述べている子どもが人格を形成する過程について、「自由選択→繰り返し→集中→正常化」の四つの段階で整理して、「活動のサイクル」とした。子どもがその「活動のサイクル」を経験するためには、それぞれの子どもの発達の状態に合わせた、物的、人的環境の調整が必要であると考えられる。子どもがこのプロセスを繰り返し経験し、スパイラルが高次化していくことで、子どもが自信をつけて、子どもの自尊感情が育ち、自律的な人格に近づいていくと考える。

モンテッソーリ教育の構成要素一つひとつは、モンテッソーリ教育の根本的思想である子どもの主体性を尊重する方向で、完結性も持ちながらもそれぞれに関連性があり、モンテッソーリ教育体系を構築している。本稿では、モンテッソーリ教育の「環境」について考察したが、モンテッソーリ教育において関連しあっている他の構成要素である、「教具」や「提供法」についても、どのように人格形成のプロセスである「活動のサイクル」に関与して、人間関係の育成に寄与しているのかということの研究を今後の課題としたい。

#### 註

[1] 文部科学省 学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について(通知), 2017

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2\\_01](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2_01)  
(最終確認日 2019年9月4日)

[2] 汐見稔幸, 無藤隆(監修) ミネルヴァ書房編集部(編)『〈平成30年度施行〉保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント』ミネルヴァ書房, pp332-333, 2018年

[3] マリア・モンテッソーリ(Maria Montessori: 1870-1952は、イタリアの医学博士、幼児教育者、

- 科学者。モンテッソーリ教育法の開発者として知られる。モンテッソーリは医師としての最初の勤務先での知的障害児の子どもの様子を観察して、知的障害児の問題は医学的な方法や知識だけでは解決されず、教育を行うことが必要であることを発見した。その経験からモンテッソーリは、教育学と心理学に深い関心を向け、児童中心主義的教育観を身につけ、治療教育においては、観察と教育を行った感覚教育の先駆者であったジャン・イタルの著書の研究を進め、知的・発達障害者教育の先駆者エドワード・セガン医師に学んだ。その後、モンテッソーリは、1907年ローマのサン・ロレンツォ地方に最初に設立した「子供の家」の責任者になり、治療教育のために考案した教育法を定型発達の子どもの教育へと展開していった。(参考文献E.M. スタンディング, クラウス・ルーメル (監修) 佐藤幸江 (訳) 『モンテッソーリの発見』)
- [4] マリア・モンテッソーリ, 菊野正隆 (監修) 武田正實 (訳) 『創造する子供』 エンデルレ書店, pp236-237, 1973年
- [5] 文部科学省 子どもの徳育に関する懇談会 (第11回)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm#contentsStart](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm#contentsStart) (最終確認日 2019年9月4日)
- [6] 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 2018  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/10/1410392.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm) (最終確認 2019年9月5日)
- [7] 厚生労働省 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について (第15次報告), 平成30年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数及び「通告受理後48時間以内の安全確認ルール」の実施状況の緊急点検の結果 2019  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000190801\\_00001.htm](https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000190801_00001.htm) (最終確認 2019年9月4日)
- [8] 『子ども・子育て支援新制度』とは、平成24年8月に成立した「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」の子ども・子育て関連3法に基づく制度のことである。子ども・子育て関連3法の主なポイントとしては1. 認定こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付(「施設型給付」)及び小規模保育等への給付(「地域型保育給付」)の創設2. 認定こども園制度の改善(幼保連携型認定こども園の改善等) 3. 地域の実情に応じた子ども・子育て支援(利用者支援、地域子育て支援拠点、放課後児童クラブなどの「地域子ども・子育て支援事業」)の充実4. 基礎自治体(市町村)が実施主体5. 社会全体による費用負担が挙げられる。
- [9] 前掲書 [2] p332
- [10] 高橋鉦, クラウス・ルーメル (監), 『モンテッソーリ教育用語辞典』, 学苑社, p146, 2006年
- [11] マリア・モンテッソーリ, 坂元堯 (訳), 『人間の形成について』, エンデルレ書店, p7, 1970年
- [12] 前掲書 [4] pp190-191
- [13] 相良敦子, 『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち—幼児の経験と脳—』, 河出書房新社, p72, 2009年
- [14] 同書p83
- [15] 前掲書 [2] p334
- [16] マリア・モンテッソーリ, 鼓常良 (訳), 『幼児の秘密』 国土社, p48, 1968年
- [17] 同書p69
- [18] 前掲書 [2] p361
- [19] 拙稿『発達が気になる子どもの療育・発達支援入門』, 金子書房, pp114-117, 2018年を再構成
- [20] 徳安敦, 坂上節子 (編著) 『生活事例からはじめる—保育内容—人間関係』, 青踏社, pp36-37,

2018年

- [21] インクルーシブ教育とはインクルージョンの理念に基づいた教育のことである。インクルージョンとは「包み込む」という意味を持つ。インテグレーションの発展型、エクスクルージョン（排除）に対峙するものとしてアメリカなどで用いられるようになった。教育の場におけるインクルージョンとは、障害の有無にかかわらず全ての子どもが、それぞれの多様性を認められながら、教育の場に包み込まれ、個々に必要な支援が保証されたうえで教育を受けることを意味している（拙稿『幼児期におけるインクルーシブ教育の実質化に向けての研究』「モンテッソーリ教育」, 第49号, p100, 2018年を再構成）
- [22] 拙稿『発達に気になる子どもの療育・発達支援入門』, 金子書房, pp177-178, 2018年を再構成
- [23] 前掲書 [4] p222
- [24] 前掲書 [16] p49
- [25] 前掲書 [2] p342

## 参考文献

- ・マリア・モンテッソーリ 鼓常良（訳）『幼児の秘密』国土社 1968年.
- ・マリア・モンテッソーリ 坂元堯（訳）『人間の形成について』エンデルレ書店 1970年.
- ・マリア・モンテッソーリ 鼓常良（訳）『子どもの発見』国土社 1971年.
- ・マリア・モンテッソーリ 菊野正隆（監修）武田正實（訳）『創造する子供』エンデルレ書店 1973年.
- ・E.M.スタンディング, クラウス・ルーメル（監修）佐藤幸江（訳）『モンテッソーリの発見』エンデルレ書店 1975年.
- ・相良敦子『モンテッソーリ教育の理論概説—モンテッソーリ教育理論と実践Ⅰ』学習研究社 1978年.
- ・相良敦子『ママ、ひとりですのを手伝ってね！—モンテッソーリの幼児教育—』講談社 1990年.
- ・杉田穂子「就学前障害児に対するモンテッソーリセラピーの日本での適用と特徴」『大阪市立大学博士論文』pp1-176, 1994年.
- ・高橋鉦 クラウス・ルーメル（監修）「人格形成」『モンテッソーリ教育用語辞典』学苑社 2006年.
- ・相良敦子『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち—幼児の経験と脳—』河出書房新社 2009年.
- ・田中正浩「マリア・モンテッソーリの子ども観—生命助成の教育の形成基盤として—」『駒澤短期大学研究紀要』45, pp21-29, 2012年.
- ・小林真・岩田夏実・岩田育代・米崎瑛美, 「保育内容（人間関係）の観点から見た劇遊びの意義—富山大学人間発達科学部附属幼稚園におけるこどもまつりの教育的効果の検討—」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』教育実践研究 第12号 通巻34号 抜刷 2017年.
- ・中川智之, 橋本他「幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容に関する一考察—保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして—」『川崎医療短期大学紀要』38号, pp63-69, 2018年.
- ・徳安敦 坂上節子（編著）『生活事例からはじめる—保育内容—人間関係』青踏社 2018年.

## Summary

A Consideration on Education for cultivates Human Relations Skills in Early childhood  
—Tentative discussion of applying Montessori educational methods to the area of human  
relationship in the childcare of the government’s kindergarten curriculum.—

Hitomi Okamoto

The purpose of this article was to examine specific educational methods for cultivating human relationship skills during early childhood, a period considered to be important for addressing social issues and ensuring proper development.

The educational objectives of the Japanese government’s kindergarten curriculum and Montessori education both include creating a foundation for personality development. They are similar in terms of the abilities, qualities, an education process, they require to nurture through education.

The specific methods employed by the Japanese government and Montessori educators were compared. The results showed that the methods used to adjust the environment, which is considered to be a building block of Montessori education, play a role in the government’s kindergarten curriculum to promote human relationship skills.

It was concluded that the systematic and specific methods employed by Montessori education are effective for cultivating human relationship skills.

**Keywords** government’s kindergarten curriculum, Human relationship skills,  
Montessori education, environment, personality development

(2019年11月7日受領)

